

特集2

IPS がやってくる

～30 年ぶりに開かれるプラネタリウムの祭典～

田部一志（会員）

1. はじめに

本誌の読者にとってプラネタリウムとは何だろう。かつてプラネタリウムは天文教育の道具の 1 つであった筈だが、今は遠い親戚のような感じではないだろうか？元気に過ごしてはいるようだが、何をやっているのかはよく知らない。天文とは関係のない世界へ遠ざかってしまった親戚もいるらしい。これは、日本の状況であって、世界はどうなのだろうか？

2026 年 6 月、福岡市で IPS (International Planetarium Society: 国際プラネタリウム協会: <https://www.ips-planetarium.org/>) の 2 年に一度の会議が開催される。昨年のドイツ大会では 600 名もの参加者があり、多くの議論が活発に行われた。メインは天文教育に直結するテーマである。日本の天文教育者としては、プラネタリウムというものを再確認できるとともに、2018 年に同じ福岡で開催された CAP (Communicating Astronomy With The Public) とは一味違った雰囲気を楽しめるだろう。

2. 世界のプラネタリウム

フランスのダニエル・オウドワン(Daniel Audoan)氏が運営する WWPDP(Worldwide Planetarium Database: <https://planetariums-database.org/>)によると、地球上には約 4000 ものプラネタリウムが存在する。そこには、投影を担当する者、機械のメンテナンスを行う者、番組制作のためのデザイナー、コードを書く者、天体望遠鏡を操作し観望会を担当する者などが居て、総称して**プラネタリアン**と呼んでいる。

IPS 会議に参加するのはその中でも強者(つわもの)達であり、オタク達である。こう書くと変人の集まりのように聞こえるが、実際は常識と慈愛に満ちた紳士・淑女たちである。いろいろな事に興味を持つ国際人であり、その興味は宇宙へも広がる宇宙人でもある。日本のプラネタリウム関係者とは少し雰囲気が違うかも知れない。

3. 謎の国日本

世界から見ると、日本はかなり特殊な国に見えるだろう。日本には現存するだけで 3 社の光学プラネタリウムメーカーが存在する。世界に 4 社しかないうちの 3 社が日本企業なのだ。現存する以外にもプラネタリウムの製作や開発に着手した個人や企業も多い。完成に至らなかった試みも多いだろう。デジタルプラネタリウムの時代になると参入の敷居は下がり、フリーのプラネタリウムソフトも現れ、多くのモバイルプラネタリウムで利用されている。現在、国内のプラネタリウム館は 300 を数えるというし、公開天文台が 400 もあり、既に 100 年の歴史を持っている。プラネタリウム用の番組や映像作品を作ったり配給したりする会社も少なくない。望遠鏡メーカーも大小含めて 10 社以上存在した時期もあった。

皆既日食があれば、数千人単位の人々が世界中どこへでも出かけていく。アマチュアの活躍もかつての彗星・小惑星の発見競争から、意味のある研究をする人材の活躍、天体写真の世界まで多岐にわたる。地域の天文同好会やボランティアグループの活動も、やや高齢化が叫ばれてはいるが盛んだ。さらに、メジ

ャーな天文雑誌が2誌あり、星まつり等のイベントも賑わっている。星のソムリエや天文検定などの資格試験が人気なのはなぜだろう。観光資源としても注目されているらしい。学校の天文クラブが舞台の映画やドラマ、サイバー空間に巣食うアングラ天文ファンとなるともう筆者は完全に門外漢だ。

まさに活況を呈しているような日本の現状が海外からどのように見えるかとても興味がある。しかし、それ以上に、われわれ日本人自身が、この状況を自らのアイデンティティとしてどう理解すれば良いのだろうか？諸外国の方々の参考になるのだろうか？

4. 天教としてどうかかわるか？

前項で述べてきたようになった日本の天文文化事情については、これまでも、断片的ではあるがプラネタリウムや公開天文台のコミュニティの中でいくらか議論が行われてきた。プラネタリウム100周年イベントや、来年予定されている公開天文台100年のイベント等が再認識の役割を果たしてきた。

歴史を辿るとその前の時代があったのだろう。1910年のハレー彗星接近や、1877年の火星の接近は世間の注目を集めた。江戸時代の初期、「天文図解」や「天経或問」などの書籍が読まれていたようだ。（どの程度普及したものかは不勉強で分かりません。）星は昴の時代からの伝統なのだろうか？

閑話休題、筆者はIPS2026Fukuokaの国内組織委員会の一員として、イベント全体の計画を作り実施する立場にある。委員会の中に多くの部会が立ち上がって鋭意内容を策定中であるが、前項で述べたような日本の天文文化についての議論が深められないかと考えている。

具体的には、現在の日本の天文教育、プラネの状況、公開天文台の状況、アマチュア天文家の状況、それぞれの歴史（断片的なのは受

け入れよう）についてのポスター発表することでIPSへの寄与をお願いしたい。（ここが主訴です。）今後まだ1年の時間があるので、口頭発表のセッションやパネルも考えたい。海外からの見え方やそれに対する解釈も聞いてみたい。念のために申し添えれば、何も国粋主義者になって日本の状況を自慢しようというのではない。

おそらく結論のようなものは無いだろう。自分が長い歴史の流れの末端にいて、過去の全ては今の自分に大きく関係しているだろうことを再認識できれば、幸福感を味わうことができるだろう。

文 献

引用しているわけではありませんが、参考になりそうな文献です。

[1] 井上毅（2023）『星空を作る機械』, 講談社（プラネタリウムについて日本語で読める決定版です。）

[2] Tabe, I. (2025) 'JAPANESE PLANETARIUMS AND THE IPS 2026 FUKUOKA' *Planetarian* 51:26-29
(IPSの機関紙へ2026年のIPS大会のお誘いのために書いた記事です。Open Accessです。)



田部一志

1956年生まれ、IPS2026Fukuoka国内組織委員会副委員長 月惑星研究会会長 株式会社リブラ代表取締役 IFSV実行委員長等、大昔天教の運営委員だったこともありました。